

青年部活動に参加して「ボクらのサンタクロース大作戦」

羽生市商工会青年部 秋元 周太

羽生市西 2 - 2 - 4

とんとん拍子 (TEL048-560-

4194 <tel:048-560-4194>)

「サンタさーん、ありがとー！」施設の園庭からは沢山の笑顔の園児たちの声。そう、我々サンタクロースに扮した商工会青年部のメンバーは、今年も子供たちにプレゼントを届けにやってきた。

皆さんこんにちは、私は羽生市商工会青年部、秋元周太と申します。羽生駅西口前で「とんとん拍子」という居酒屋を家族と営んでおります。もともとはさいたま市にて小さな店を構えていましたが、30歳を過ぎたことをきっかけに生まれ育った地元、羽生に帰り両親の経営する店を継ぐ決意をしました。しかし地元とはいえ、十数年羽生を離れた事もあり、知っている人や店はほぼ皆無「30過ぎてこんな田舎に帰ってきちゃったけどほんとにやっていけるのかなー？」と不安な日々を送っていると当時仲良くなりはじめた常連さんに「それなら青年部に入ってみれば？」と半ば強引に商工会青年部の人を連れてきました。「めんどくさいなー、どうやって断ろう」と考えてはいたものの、あれよあれよと店名通りの「とんとん拍子」気がつけば私も青年部の一員に。

私が入部して3年目が過ぎたとある日の全体会議。私たちは翌年に控えた創立50周年の記念事業をどうするか議論を交わしていました。そこで出た案として40周年の際に行ったものの、当時は部員が少なく一度しか実現できなかった児童養護施設訪問事業を10年ぶりに復活させ、部員が20名程増加した今後は毎年の継続事業に出来ないか？という意見でした。そこで実行委員長として任命されたのが当時副部長を務めていた私でした。

早速、当時の資料や関わった先輩方の話を参考に、どんな事業だったのか情報収集を開始。どういったことをすれば子供たちが喜んでくれるのだろうか？自分たちに一体何がしてあげられるだろうか？委員会や会議で揉み、先方との度重なる打ち合わせの結果「子供たちと食事をし、一緒に遊ぼう」という企画になりました。

我々商工会青年部はイベント開催時に必要な全ての業種の揃った、いわば“なんでも屋さん”屋外では青年部員によるバーベキュー。精肉店の部員が用意した肉やフランク、八百屋の部員が用意した野菜を、ガス屋の部員が用意した特大の焼き台で焼き、ケータリング会社で務める部員が取り分け配膳する。屋内では飲

食店の部員が協力して作ったカレーをボランティアさんが振る舞う。

ただ一言でカレーといっても全員同じ物では面白くない、子供たちが自分だけのオリジナリティを出せるよう、トッピングを充実させました。福神漬けやらっきょうはもちろん、チーズやカツ、から揚げ、ゆで卵に辛味スパイス等、幼稚園児から中学生までいる全ての子供たちが満足してくれるよう、工夫して準備しました。その結果、違った味のカレーをおかわりしようとする子供達の行列ができ、食事タイムの1時間が経つ頃には寸胴で作った70人前ほどのカレーをはじめ、用意した全ての食材が空っぽになっていました。

おなががいっぱいになった子供たちが休憩している間に我々は片付けを済ませ午後からは、参加者全員によるレクリエーションタイム。イス取りゲーム、障害物リレー、イントロクイズなど、様々なゲームを行いました、朝の開会式の頃にはおとなしかった子供たちも、一緒に食事をしたことにより、その距離はグッと縮み大人も子供も一緒になり時間を忘れ夢中になって遊びました。楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、気付けばもう閉会式に。

さっきまで笑顔で戯れていた子供たちも我々が帰ると悟ると寂しげな表情に。なかには「帰らないで」と泣き出す子まで。「また来年も来るからね」と約束を交わし私たちも後ろ髪を引かれる想いで施設を後にしました。

思い返せば、この事業を開催しようとしたあの会議の日は、こんなにも子供たちが喜んでくれる、また、自分たちもがこんなに楽しめるイベントになるとは思ってもいませんでした。好評だったこの事業は先方様からの熱い要望もあり、当初の予定通り毎年の恒例事業となりました。

年に一度顔を合わせる施設の子供たちは赤ちゃんから子供へと、小学生から中学生へと、その成長する姿を見ることが、いつの間にか我々青年部員の楽しみの一つとなっていました。また、ボランティア依頼の協力をお願いしていた地元短期大学様からもこの事業は人気のようで第1回目は3名だったボランティアさんも2回目8名、3回目14名とどんどん希望者が殺到するようになり自分たちがやっていることが様々な方から広く支持されているという自信へと繋がりました。

しかし、4回目を開催しようという年に世界中に広まった「新型コロナウイルス」という姿の见えない大きな壁。人と人との接触の多いこの事業は子供達を感染させてしまう大きなリスクしかありません。ただ、50周年から続けてきたこの大切な事業は決して絶やしてはならない。その想いで今、私たちに出来るナニカとして出た案がサンタ事業でした。

早速、施設にその旨を伝えるとすぐに快諾していただき、プレゼントのリスト

を作成。ボードゲーム、映画のDVD、キックボードに漫画の全巻セット。

購入時、特に苦労したのが、当時爆発的人気により入手困難だったアニメのコミックス、しかし、そこは青年部の日頃のチームワークの見せ所。買えた巻のチェックリストを作りメンバーで共有しみんなで協力した結果、無事コンプリートすることができました。

そしてやってきた、待ちに待ったクリスマスイブ。スーツや作業服から真っ赤なサンタクロースへと変身した我々青年部員は沢山のプレゼントを担ぎ子供たちのもとへ。全員と触れ合うことはできませんが代表の子供数名と施設職員さんにプレゼントを渡し記念撮影をしてイベントは終了。帰ろうと施設を出る私たちに各棟のベランダから「サンタさーん、ありがとー！」と叫ぶ大勢の子供たち。コロナ禍でやりたいことを自由にできないこのご時世仲間と団結して今回試みたこのサンタ計画。あの子供たちのキラキラと輝く笑顔を見たとき「これでよかったんだ」と努力の全てが報われた瞬間でした。

翌年はこのサンタ事業を更に拡大すべく、市内にあるもう一つの児童養護施設にも訪問しました。我々青年部サンタの登場を心待ちにしてくれる子供が増えると共に、今後は更にその輪を広げ、老人ホームや障害者施設等、もっともっと沢山人々に夢や希望をプレゼント出来る存在になっていきたいと思います。

どうかこの50周年をきっかけに再スタートした児童養護施設訪問事業を、時代背景やニーズにあったやり方に変えながらも自分が青年部から去った後の10年、20年後へと繋がっていきますように。

最後に私には夢があります。この事業がきっかけで縁を持ったこの少年少女たちが、いずれ施設を巣立ち、近い将来成人し、社会に出てできた仲間を連れて私の店を訪ねてくれることです。恐らくその頃には私の顔なんて覚えてない事でしょう。

だから、その時は目の前で焼き鳥を焼いているおじさんが、あの時のサンタさんだった事は内緒にしておきましょう。こっそり焼き鳥を1本だけサービスして心の中で

「メリークリスマス！」

ご清聴ありがとうございました。